

松村通信第162号

7月12日
松村勝弘

日下を、なぜクサカと読むのか

近況 前々号でも書いたように、最近は飲み会三昧です。今回のお話の半分以上は、いわば「飲み会便り」となっています。ご容赦ください。前々号をアップした5月23日には経営学部校友会常任幹事会だった。そのなかでの話しは省略するが、その節に今後の講演に、「お酒の美術館」を主宰している滝下信夫さんをお願いしてはどうかという提案をした。滝下さんの講演は8月31日の経営学部校友会総会での講演に結びつきました。

滝下さんとは長らくのおつきあいで、この会社との付き合いも長い。「お酒の美術館」は最近出店ラッシュである。都ホテル京都八条での常任幹事会終了後、「お酒の美術館」を紹介したいと思っていたので、ちょうど京都駅八条口に店舗があったので、三人でお店にうかがった。もちろんお酒を飲んだ。こんなブランドもあった。



まさに「滝下」である。

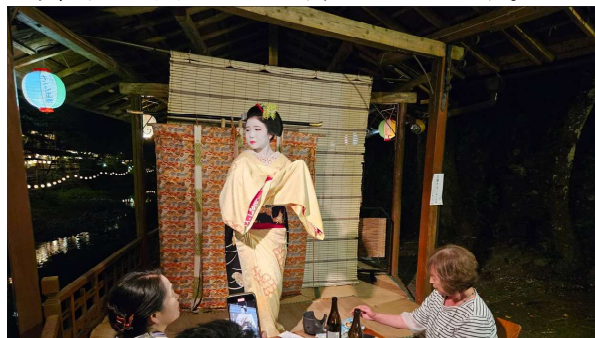
5月31日には広島県の「マツダスタジアム」での「広島阪神戦」の観戦をした。これは阪神の快勝であった。最近阪神の調子がよい。もちろん、終了後は広島ファンのG君、阪神ファンのA君、Y君といっしょに飲み会だった。野球観戦と飲み会のどちらが目的なのかと思われるだろう。写真は大竹投手へのヒーローインタビューの様態です。実はこの場所の近くで観戦していたのです。いい席を

取ってくれたG君に感謝、感謝です。広島での観戦と飲み会は、もう一〇年以上続いている。恒例の会なのです。



6月7日には「立命館 松村先生を囲む会」というのを、わがゼミ卒業生が開いたので三条会商店街にある「あみたつ屋台」で飲みました。21日には校友の三都クラブの「高雄蜆鑑賞会」があった。これも恒例である。おまけに先述の「お酒の美術館」がBivi二条に、その前日、開店されたところで、蜆鑑賞会のための二条駅集合の前にそこへ寄って引かけました。鑑賞会を終えて二条駅に戻ったときもまたまたVibiの「お酒の美術館」へ後輩を誘って寄りました。「高雄蜆鑑賞会」では上七軒の芸舞妓さんのおどりも楽しみました。ま、飲みかつ喰ったというべきだろうか。とにかく、最近は校友との付き合いが中心です。こういう付き合いのできる校友があることはありがたいことです。で、高雄の蜆

鑑賞会の写真をつぎに掲げておきます。



もちろん、学会にも参加しています。6月28日には東京八王子の創価大学で、日本財務管理学会の統一論題での司会進行を承り、司会進行を無事終えました。そのときの写真が下にあります。

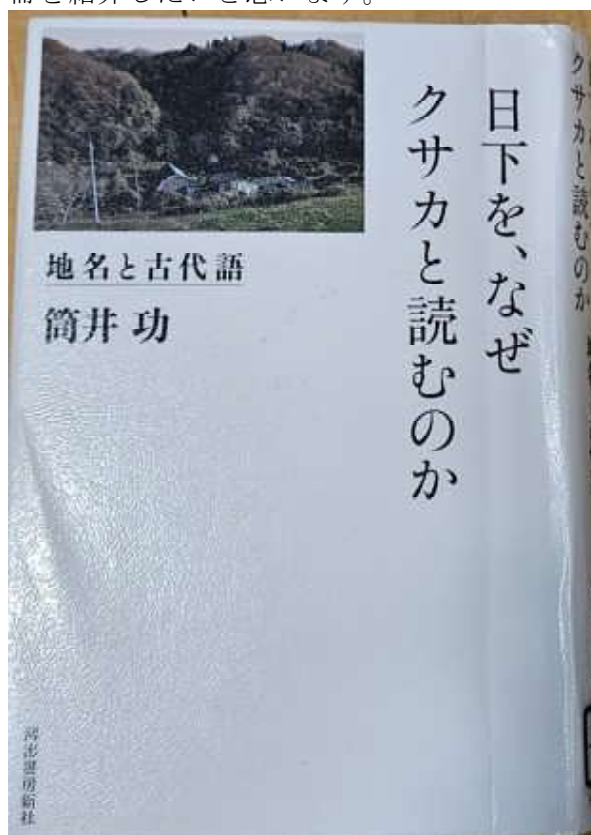


その前夜にはわざわざ八王子でのチェックインを終えてから新宿での卒業生らによる「立命館 松村先生を囲む会」があり、楽しんだが、その後に八王子への戻りが、当然遅くなって疲れました。学会の前日にこんなこととしていいのかしらと思われるでしょう。ま、この年齢になっているので許されるでしょう。新宿での飲み会は下の通りです。



実はその翌日には経営管理研究科の同窓会 RIMO 校友会の総会・講演会・懇親会があり

ました。いわゆる三連チャンだったわけです。しかも、RIMO 校友会の懇親会で、7月5日の OIC で行われる大阪校友会への参加を「無理矢理」（言い過ぎですが）求められ、校友の皆さんと会えるのを楽しむことになりました。12日には「日本酒の会」同窓会が、古川町万両で行われます。まさに、飲んでばっかり。**読書三昧** 近頃は、立命館大学の図書を読むだけでなく、京都市の図書館の図書を読みます。こちらは、専門外の図書が中心です。日本人の祖先の多くが渡来人であるということが DNA 鑑定で近年わかってきたようです。渡来人関連の本も借りて読みました。古代は、日本だけではなく、面白いです。その中の一冊を紹介したいと思います。



それは、筒井功『日下を、なぜクサカと読むのか』（河出書房新社、2024年）がそれである。その章題を見ただけでも、興味をそえられる。紹介してみよう。

第一章 「日下」と書いて、なぜ「くさか」と読むのか

第二章 「笠置」は「日陰地」を意味していた

第三章 『日本書紀』の「^{つらまきだ}頬枕田」は円形の田を指す

第四章 「鳥居」のトリとは境のことである

第五章 卑弥呼のような女性のことを

- 「^{おおいち}大市」といった
第六章 「国」は「山に囲まれた土地」
のことだった
第七章 「山中」と「中山」は同じか、
違うか
第八章 「ツマ(妻)」の原義は「そば」
「へり」である
第九章 「アオ」「イヤ」は葬地を指す
言葉であった
第一〇章 「賽の河原」とは、どんなと
ころか

著者は、「日下」の前に、数多くある「草」のついた地名の探索からはじめられた。古い地名に残っている小字の名前から探索されている。あるとき茨城県の方言に触れる機会があった。そこに「コサ(日陰地)」というのがあった。「わたしは、すでに何カ所もの草地名をまわっていたので、すぐにぴんと来た。その谷間の集落は、コサ＝クサ(日陰地)の条件を完全にそなえていたのである。」(30 頁)そして『日下』も草地名の一つである(27 頁)ことを突き止められる。著者はまた、各地にある「クサカ」と「クサキ」の名のある場所を探索され、その地形が「日陰地」であることを突き止められる。著者は「笠置」についても「わたしはもちろん、カサギとは日陰地のことだと考えている。……カサはコサ、クサと同語で、『日の光をさえぎるもの』『日が当たらないところ』の意である。」(40 頁)といわれている。著者は、その地を訪れて、地形などから地名の由来を探究するという、フィールドワークを重ねるといふ、苦労の末にさまざまな発見をされている。本書でも自分で撮られた写真が随所に出てくる。

「日本の地名は意味不明のものだらけだというのは、内外の研究者、観察者のほぼ一致した感想であり、嘆息である。わたしも、そのとおりだと思う。なぜ、こんなにわけのわからない地名が多いのか、その理由さえはつきりしないほどである。」(59 頁)だからこそ、現地を訪いて探究し、古代の文献をもひもといて解明されている。

弦巻 「ツルマキ」という地名は各地に少なくない、という。「弦巻は、弓に張る弦(つる、げん)を入れておくための器具である。薄いドーナツを二枚重ねたような直径十数センチの器具で、あいだに弦をまいておく。巻き方は遊具のヨーヨーの要領である。……その連想から丸みを帯びた地形、地物にツルマキの名を付けたのだと思われる。」(64-65 頁)鶴蒔田、鶴巻田などの小字は「馬蹄形の田」「川の湾局部に沿った田」からきているのを、現地を見て確認されている。その延長線上に鶴巻などの地名もある。『日本書紀』の「神

武天皇即位前紀」にも、「^{つらまき だ}頼枕田」という地名が出ているという。「これによって、書紀が成立した七二〇年より以前に、大和すなわち現在の奈良県のどこかに『ツラマキダ』と人びとが呼ぶ水田があったことがわかる。」(80 頁)そういわれる。

「鳥居」のトリは境 全国に鳥居峠・鳥井峠という地名がある。「峠に立てていた柱と、神社の前の鳥居には、実は本質的な違いはなかろう。鳥居は神の領域を示すためのしるしであり、峠の柱は神と人との世界を分ける境界の象徴だったからである。」(87 頁)「鳥坂」という地名も同旨で「それは、『境、境界』を意味することばであり、空を飛ぶ鳥とは何らかのかわりもない。……鳥居のトリも、鳥坂のトリと同じで、『境』のことである。」(89 頁)笠取峠や笠取山という地名も「^{トリ}トリ」は境である。京都の三大墓地の一つ「鳥辺野」は今の大本寺のあたり、「いわゆる東山と、その麓の境界域の呼び名だったのではないか。べは山辺、川辺、池辺、沼辺などの『べ』で、トリべは境のあたりを意味していたろう。」(95 頁)こういわれている。そのほかでも、境、境界に「トリ」の付く地名は多いという。

「国」は「山に囲まれた土地」 『魏志倭人伝』のはじめ、「倭人は^{くさ}葦方の東南大海の中に在り、山島に依りて国邑を為す。旧百余国。漢の時朝見するもの有り、今^い使訳通ずる所三十^{まつ}国」とあるが、そこに「投馬国」「奴国」「末盧国」「伊都国」などの国が挙げられている。著者は、ここでの国はある一定の広さを待った地域単位で、当時のクニがどんなものであったかを推測している。クニの語源については多くの説があるが、和歌山県の国木原は「まわりをすっぽりと山に囲まれた谷底の村である。……クニキハラ^{クニ}のクニとは、このような四周をぐるりと山がめぐっている土地を指す」(129-130 頁)としている。類似の福島県の久子ノ内について「久子ノ内は『クニ(山が取り囲んだ土地または、その山々のこと)の内』の意になる。」(157 頁)ほかの例もあげながらクニは「クニと同一の言葉であった可能性が高い」(138 頁)、という。「小国」という地名も多い。『小国』の名が付いているところが、ほとんど盆地である(142 頁)。「大国」もしかりで、「クニがきわめて古い時代には『山に囲まれた土地』を原義とし、のち邪馬台国や投馬国、伊都国などのクニを指す言葉に変化していったことは間違いないのではないか。」(144 頁)数多くの事例からこのように推測されている。

「妻(ツマ)」の原義は「そば」「へり」
関東地方のの一部を中心に「中妻(仲妻)」

という地名が見られるという。この中妻はカワチと同じ地形を指すという。中妻は川に面していたり、低湿地であり、西日本に多いカワチ（カワウチ、コウチ、カチなどとも）地形の場所に、よく似ているという（168 頁）。とにかく、著者は現地を歩いて地形を確認しながら地名の由来を確認するという手法をとられている。

「茨城県取手市小文間字中妻…利根川左岸（北岸）に沿った東西三キロほど、南北一キロ前後の台地の北側へりに位置する。今前面（北側）は広大な水田になっているが、古くは小貝川（利根川の支流）の氾濫原であったろう。……要するに、この一帯はもとは海であり、その後、少しずつ陸地化して、増水時にだけ水に浸かる氾濫原であったが、今では水田になっているのである。そうして、台地と氾濫原との境あたりをコウチ（河内）ともナカツマとも称していたことになる。」（168-169 頁）

川妻は、二つの大河のあいだの島のようなところであり、「川の妻」の名にぴったりの土地であったろう、などと推測されている。そして、妻をもとに下妻、中妻、上妻ができたのではないかと推測されている。ツマは川べりの意だと考えてよいのではないかとされる（179 頁）。

賽の河原 「公益社」のサイトにこう書いてありました。「賽の河原（さいのかわら）とは、死出の旅（しでのたび）の途中にある河原です。仏教の教えでは、人は死ぬと冥途（めいど）の旅に出ます。死出の山路と呼ばれる約 800 里（約 300 キロ以上）の道のりを 49 日かけて歩くことになります。暗い山道を一人寂しく歩いて行くと、賽の河原に出ます。賽の河原の向こうには、三途の川があり対岸へ渡らなければなりません。三途の川へ辿り着くのが、ちょうど初七日の頃と言われています。……親よりも先に死んでしまった子供は三途の川を渡ることできません。三途の川の手前にある賽の河原で、石を積み上げ続けることになります。」説明は長々と続いています。が、これくらいでつぎに進みましょう。

「サイノカワラ」と呼ばれるところが、あちこちにあることに気づいている人は少なくあるまい。文字では『賽の河原』『賽ノ河原』と書くことが、もっとも多いようである。サイに『西』の漢字を当てたり、片仮名を用いている場合も見られる。また、カワラを『磧』と表記する例もある。」（210 頁）私など京都人は、西院を思い出す。これが賽の河原に由来していることを知っているからだ。京福電鉄の駅名はこれを「サイ」と読ませているが、阪急電鉄はそのまんま「サイイン」と読ませ

ている。この本には西院のことは書いてないのですが。

「青森県むつ市田名部字宇曾利山の賽ノ河原……は、有名な信仰の場であるとともに人気の観光地でもある恐山の一角に位置している。その名のオソレは、小字のウソリに漢字の『恐』を当てたものである。ウソリはアイヌ語のウショロに由来し、『窪地』を指すとの説が当たっているのではないかと。そこは宇曾利山湖に臨んだ、ごつごつした白っぽい火山礫の原で、見るからに地獄を思わせる風景が広がっている。」（212 頁）まさに賽の河原である。このように、「サイノカワラ」と付いた地名のところは、あちこちにあるが、地獄を連想させる場所であるという。また、サイノカワラは洞窟との関連も深いという。

柳田國男 著者はさらに言う。『『サイノカワラ』という言葉が本来、何を意味していたのかは、柳田國男が『葬制の沿革について』[などで]明解な解釈を下している。

それによると、サイはサエ（境の義）のことであり、すなわち『死者の去り進む地』であった。カワラは『河原』ではなく、ゴウラを指すとするのが柳田の立場である。ゴウラ（またゴウロとも）は、柳田の言い方にならえば『小石原』のことで、箱根（神奈川県足柄下郡箱根町）の強羅もこれになる。

要するに、柳田はサイノカワラはサエノゴウラの訛りだとしていたのである。すでに紹介した事実から考えて、わたしは、これは卓見だと思う。ただし、ゴウラは小石原というよりは、かなり大きめの石あるいは、ごつごつした岩の原の場合が多いのではないかと。

（223 頁）「ゴウラ、ゴウロは、おそらくゴロゴロという擬音語からできた言葉であり、もともと当てるべき漢字がなかった。この地名に片仮名表記や、強羅、強楽など、いかにも不自然な文字が目につくのは、そのせいであろう。」（230 頁）著者は各地の現場を歩いているから、説明も納得がいく。

柳田國男は偉大な民俗学者だ。著者筒井は柳田に敬意を表している。しかも、自分で歩いて確かめながら書いている。地に足が付いている。見習うべき点が多い。改めて、民俗学に惹かれる。京都には散歩していると、よく路傍のお地藏さんを見かける。これなども調べたら面白いことがわかりそうな気がする。

HP、FBを見て下さい。又何でも意見を。

皆さんのご意見を歓迎します。HP
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。
フェイスブックもやってます。また、メールで意見
交換しましょう。メールをよこして下さい
(matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。